

## 西条土与丸に残る伝説

### 《牛満長者》

文責：榎野育司

むかしむかし、西条土与丸に毎日「ほうろく」を売って歩く男がおりました。

「ほうろく」とは、盆を大きくしたような素焼きの土器で、豆を炒ったり茶を焙じたりする台所の道具です。男は、とてもとても貧しい暮らしをしておりました。ある日のことです。今日も男は、「ほうろく」を天秤棒にかついであきないに出かけました。「松子山峠」にさしかかると、一頭の大きな牛が倒れておりました。男は、

「お前、どうしたんならー」

と、そばによって腹をさすってやり、自分の持っている弁当のおにぎりを1個分けてやりました。牛はうまそうに口をもぐもぐさせて食べました。男は、

「お前をみとってやりゃーいいんじゃないけど、わしゃあ商売があるけんの一。今から竹原へいくんじゃない。はようよなれよー。」

と言いおいて、その場を立ち去りました。あくる日もそこを通りかかると昨日の牛が同じように倒れておりました。

また腹をさすってやり、お弁当のおにぎりを分けてやりました。次の日も、また次の日も腹をさすってやり、お弁当のおにぎりを分けてやったのです。

ある日のことです。いつもの場所を通りかかると、あの牛の姿が見えません。男はあちらこちらを探して回りました。そうすると、道より少し奥に入ったところで牛は死んでいました。

「わりゃー、かわいそうに死んだかやー。」

と言いながら腹をさすってやりました。するとどうしたことでしょう。牛は急にガチャガチャと音を立ててこわれ、それが見る間に金になりました。これで貧しい「ほうろく売り」の男は、いちやく大金持ちになり、「牛満長者」と呼ばれるようになりました。

それからは、西条の田地のほとんどがこの長者のものになりました。長者の田植えは、「平岩谷(ひらいわだに)」から始められました。今も「平岩谷」は、松子山からかねもり池に至る谷に「小字(こあざ)」という地名が残っていますが、「歌謡坂(うたうたいざか)」と呼ばれる一里塚もあります。この名は、長者の田植えが田植唄を歌いながら、ここより出発した名であると言われていています。たくさんの早乙女たちによって植えていきました。「浜田」(現在の郵便局のあたり)で昼食を食べ、さらに西に向って田を植えていきました。やがて「寺家」をすぎて「飯田村」(現在の八本松)との境近くまで来ると、日は西に傾きはじめました。それでも田植えは終わらず、早乙女たちはひもじさと疲れで倒れそうになりました。そこでこのあたりを「飢坂(かつえざか)」と呼ぶようになりました。

長者の屋敷には、一つの「開かずの蔵」というのがあり、絶対に人は入ってはならないということになっていました。「入るな」といわれると入ってみたいくなるのが人の気持ちです。ある男がこっそりと蔵の戸を開けてみると、一枚の「ほうろく」がかけてありました。ところがどうしたことでしょう。戸を開けるや否や、その「ほうろく」は一羽の白鳥となって東の方、高屋の「白鳥山」の方へ飛んでいってしまいました。そのことがあって、長者はみるまに財産を失いとうとうもとの貧乏な暮らしにもどりました。



## 安芸国分寺について

(東広島市教育委員会 冊子より)

奈良時代、聖武天皇は疫病と飢饉や反乱などによる国土の荒廃を憂い、国家の鎮護を祈念とする目的で天平13年2月14日、諸国に国分二寺(僧寺・尼寺)の建立を命じました。僧寺は「金光明四天王護国乃寺」、尼寺は「法華滅罪之寺」が正式な名称です。

安芸国では、西条盆地の北縁の東広島市西条町吉行伽藍に国分寺が造営されました。国分尼寺の位置は明らかではありませんが、国分僧寺の東側(字尼寺)一帯にあったと考えられています。

江戸末期に編纂された芸藩通志には、国分寺縁起が収録されていて、それによれば「当時は31代用明天皇太子、優婆塞圓通が御開基の地なり」とあるため、国分寺建立以前に建てられていた寺院を転用して国分寺としたとする説もありましたが、これまでの発掘調査では前身寺院の遺構は確認されていません。

伽藍は南から金堂、行動、僧房が一直線に並ぶ東大寺式の伽藍配置で、塔は伽藍中心線より西側に造られています。中門と南門の位置が未確定であることや北側築地が確認されていない為、寺域の南北規模は不明ですが、東と日の築地は確認されていて、東西約255mの規模であったことがわかっています。

国分寺造立の命が下ったのち、諸国で国分寺の造営が始まりますが、造営ははかどらず、天平勝宝8(756)年5月に聖武天皇が亡くなった直後に、造立の進捗状況を確認するため、都から諸国に使いが派遣されています。しかし、その状況は芳しくなく、6月には庶務天皇の一周忌に向けて仏像と金堂を完成させるよう命令が出されています。

安芸国分寺では、天平勝宝2(750)年4月29日銘のある木簡をはじめ、多量の木簡とともに「安居」「齋会」といった墨書きのある須恵器や瓦、土器が一つの土坑(ゴミ捨て穴)から出土していて、同時期に投棄されたものと考えれば、毎年4月15日からの安居(夏季の修行)が天平勝宝2年頃には安芸国分寺で行われたことになり、金堂などの主要建物ができあがっていたと考えられます。天平勝宝8(756)年6月に工事を急がせる命が下り、同12月には安芸国を含む26か国に仏具が配付されていますが、この26か国はその段階で国分寺の造営がかなり進んでいたグループだったと考えられます。

また、文献上では奈良時代に都から各国に派遣された僧官である「国師」がいたことはわかっていますが、その国師は各国のどこを拠点としていたかは明らかではありませんでした。安芸国分寺の調査では、その拠点となる国師院(国師の事務所)が国分寺の寺域内に置かれていたことを全国で初めて突き止めています。

### 安芸国分寺歴史公園について

安芸国分寺は、昭和11年に塔跡が国史跡に指定され、昭和57年に主要伽藍部分が、平成7年に西側部分が追加指定され現在に至っています。史跡を保存するとともに悠久の時の流れに想いをはせ、先人たちの技や文化を追体験できる歴史の学習の場として、また市民の憩いの場とするため、平成11年度から平成24年度まで15年かけて安芸国分寺史公園を整備しました。

公園内に復元された講堂基壇や僧房基壇などの遺構は、発掘調査によって明らかになった国分寺の創建の頃の様子を示しています。

